

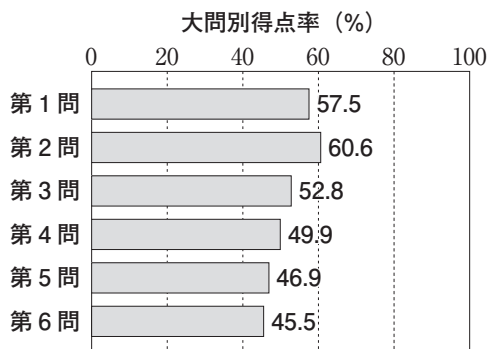
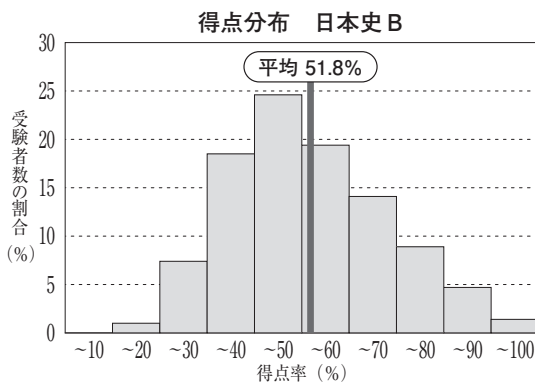
日本史 B

学習の「幅」を広げていこう。本当の勝負はここからだ。

I. 全体講評

記録的な猛暑であった今夏、有意義な時間を過ごせたであろうか。残暑が厳しい中、第3回8月センター試験本番レベル模試が実施された。

第3回8月センター試験本番レベル模試の平均点は51.8点と、前回の結果(49.9点)を上回った。はじめて5割台にのり、実りある秋にむけて幸先のよいスタートであった。これまでは、第5問、第6問の近代分野で大きく失速するパターンであったが、今回の得点率はそれぞれ、46.9%、45.5%と何とか踏みとどまれた印象だ。この夏に近現代史の学習にも本腰を入れはじめた状況をうかがうことができる。学習の進捗に応じて復習量も多くなるが、本当の勝負がここからだ。一日一時代の復習を目標に、学習の「幅」を広げていこう。



II. 大問別分析

第1問 中国・四国地方の史跡

探究型の問題にも柔軟に対応できるよう、準備をしておこう！

古代から近現代にわたる中国・四国地方の史跡を「表」に提示しつつ、基本的な内容を問うた。通史学習で得た情報を応用する探究型の問題にも対応できるよう準備をしておこう。

第1問の得点率は57.5%と、「まずまず」の数字であった。遺跡や古墳の形態を問うた問1や院政期から室町期の時代整序問題の問3はそれぞれ、73.2%、80.1%と納得のいく結果であった。一方、近世初期の貿易と関連する場所を問うた問4は28.1%と大きく崩れ、受験者の解答も分散した。地図については、センター試験・日本史 B では必須である。図説集をうまく活用した学習を遂行していこう。

第2問 古代の政治・社会

歴史研究の動向を注視し、時事的な話題に常に関心をもつようにしよう！

近年の古代史研究の動向や平安京を取り上げ、古代の政治・社会を中心に出题した。センター試験・日本史 B は時事的な話題に「敏感」であり出題内容に盛り込まれることがよくある。歴史研究の動向にも注視することが大切だ。

第2問の得点率は60.6%と6割の壁を突破した。5割を確保できなかったのは、空欄補充問題の問4(46.4%)のみで、全体的に安定していたといえよう。問4は「慶滋保胤」と「源信(恵心僧都)」の事績を混同してしまっている受験者が多かった。これは基本事項といえるので、再度、解答解説を熟読することで入念に点検してほしい。

第3問 桂女と大原女

必ず出題される「視覚資料」は、教科書・図説集で常時、確認しながら学んでいこう！

桂女と大原女を取り上げ、中世の総合問題として出題した。社会経済史は時代背景に投影させること

で、理解重視の学習を心がけていこう。

第3問の得点率は52.8%と5割は確保できたが、決定打を欠いた印象だ。問1・問2は7割台を確保して好調であったが、そのあとが続かなかった。今回のセンター日本史本番レベル模試でも、当時描かれた「大原女」を提示したが、社会経済史の場合、視覚資料をともなって出題される傾向が強い。教科書に掲載されている視覚資料は何を意味するのか、などに留意することが大切である。

第4問 江戸・大坂の大火

近世文化史や社会経済史は膨大な量があるため、早めの対策を！

江戸・大坂で起こった大火を題材に、近世の政治・社会に関する問題を出題した。「大火」が幕政に及ぼした影響について、深く考える機会にしてほしい。

第4問の得点率は49.9%と5割台目前の数字に終わった。問1・問4・問6がそれぞれ、33.8%、35.1%、38.9%と低調であった。問4では、「天明」・「天保」など類似語句を分析させる問題であったが、それらの知識がまだ固まっていない状況を推察できる。問6は、近世儒学や経世思想の分野であったが、苦手意識を露呈した結果になった。とくに近世文化と社会経済史は膨大な量があるため、学習箇所をつくらぬよう気をつけたい。

第5問 錦絵と報道

混乱しがちな幕末・明治期の学習は、テーマごとにまとめることで乗り越えよう！

錦絵と報道をテーマとして、幕末・明治期から出題した。幕末・明治期は多岐に及ぶ歴史が入り組んでいることから、テーマごとに整理しながら学習を進捗させていこう。

第5問の得点率は、46.9%と、5割を下回る結果に終わった。それでも、得点が伸び悩む傾向にある明治文化を問うた問3は62.4%と、第5問のなかで最高の数字を残せたことは評価できるだろう。夏を過ぎた今、これからは近代史の学習も加速させていきたいところだ。

第6問 近現代の近衛家

「戦争」はなぜ、おこったのか、といった大きな視野をもちながら、今後に繋がる勉強をしよう！

近現代の近衛家という人物史とテーマ史を折衷した性格を持つ問題文とした。設問文は特殊テーマであったが、問われている内容は基礎・標準レベルである。腰を据えてじっくり問題にあたろう。

第6問の得点率は45.5%と、前回第6問の得点率29.2%を大きく上回り、5割を射程にとらえる水準にまで上げてきた。設問8題中、5割を確保できた設問は問3(51.6%)、問5(50.0%)、問7(56.8%)と3題にのぼった。その一方で、日清・日露戦争をテーマとした問2が37.0%、日中戦争について問うた問6が36.3%にとどまった。「戦争」はなぜ、おこったのか、といった大きな視野から、理解を深めていくことが重要だ。

Ⅲ. 学習アドバイス

◆一日一時代

言うまでもなく、学習の進捗に応じて、復習の「幅」も大きくなっていくのが、歴史学習の特徴だ。近現代史を学習しながらも、前の時代に戻って、毎日、「一時代」、教科書やまとめたノートを読み切る習慣をつけていこう。これまで蓄積した知識をしっかりと記憶にとどめておくためには、「振り返り」の学習が何よりも大切であることを自覚しよう。

◆近現代史の学習の心得

2学期以降はいよいよ近現代史の学習に本腰を入れるだろう。まず、受験生の難所として壁になるのが、経済史である。経済史は難解な語句が多いことから、表面的な暗記作業に終始してしまう傾向がある。理解を深めるためには、経済史に焦点をあてたテーマ学習を推奨したい。学習が進むにつれ、その時々を経済状況が社会に与えた影響は甚大であることに気づかされるだろう。

一 毎日を生きよ。

あなたの人生が始まったときのように
—
ゲーテ